

ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)3月24日(火)

堺市西区 嵐菜乃花 (20)

【十字架】

多くの人に読んでもらいたい一冊がある。重松清さんの『十字架』という本だ。

いじめを苦に自殺した同級生の男子が遺書の中で主人公の「僕」のことを「親友」と書いていた。しかし、「僕」はいじめを知りながら、見て見ぬふりをしていただけだった。なぜ「僕」の名が……。この本は、その主人公が後悔という十字架を背負って生きていく小説だ。

私はこの本をまず両親に勧めた。映画化もされており、友人には映画を見るよう勧めた。しかし、両親は重すぎてしんどいと途中で読むのをやめ、友人も同じことを言った。実は私も読み終わったあとモヤモヤしてボーっとしてしまふことが多かった。映画化を知ったのも最近で、友人と一緒に観たが、やはり何とも言えない苦さが残った。

みんなが向き合う課題がここに

けれど今、「〇〇県〇〇市内の中学で起きたいじめが原因とみられる自殺事件に……」と聞いても、どこのニュースだったか忘れてしまつぐらいいじめとみられる自殺は多い。実際、十代の自殺件数は増えているらしい。

主人公の「僕」は遺族といたたまれないやりとりを繰り返して、大人になってゆく。この本はフィクションだが重い「物語」で終わるのではなく、いつ自分や身近な人に起きてもおかしくないのだと、真剣に受け止められるようになるべきだと思う。

最近教師が教師をいじめていたというニュースもあった。私も教師をめざしているが、子供の世界に限った話ではない。みんながさまざまな立場からいじめに向き合い、何ができるか、考えなければいけない。

重松清 (講談社文庫)

2020. 3. 24

※無断転載不可